

文学博士 麻生磯次 著

国文解釈と国文学史



山田書院刊

—国文解釈と国文学史—

昭和 32 年 8 月 25 日 印 刷

昭和 32 年 9 月 1 日 初版発行

定 価 280 円

地方売価 290 円



複 製

著 者 麻 生 磯 次

発 行 者 山 田 米 吉

印 刷 者 柳 川 太 郎

印 刷 所 凸版印刷株式会社
東京都板橋区志村町 5 番地

東京都千代田区神田三崎町 2-9

発 行 所

山 田 書 院

電 話 ・ 九 段 (33) 0571-4 番
振 替 口 座 ・ 東 京 7024 番

は し が き

国文学史を読んで見たいが、どれもこれも面白くなさそうで、ちょっと手に取る気にはなれない、という声を折々耳にする。なるほど、面白く読んでいううちに、いつの間にか国文学の知識がひろがるものなら、こんな都合のよいことはないであろう。国文学以外の人々の味覚にもあうように、古典の厨房あづまばうを開くのも、必要なことかも知れない。そんなことを考えながら、本書の筆をとって見たのである。だが、読んで面白いように、古典をうまく料理するのは、なかなか骨の折れる仕事である。本書も果して所期の目的を達したかどうか、甚だ心もとない感じがする。

今までの国文学史が、一般の人々に縁遠く思われたのは、ただ作品や作家の解説をしただけで、具体的な作品例に乏しかったためであつたかも知れない。本書ではそんなことを考えて、あらゆるジャンルにわたり、できるだけ多くの作品を掲かげることにした。もとより限られた紙数であるから、掲出したのはごく一部分に過ぎないが、たとえそれがわずかな断章であっても、その作品を説明するに都合のよい一節を選び出し、地の文と引用文とがからみ合つて、全体の理解を深めるように留意したのである。

作品はそれをぼつんと引き離して見るよりも、文学史的な流れの上にのせて眺める方が、本当の姿をつかむことができる。それに本書では味統に便宜なように、引用文には脚注を加え、現代語訳も添えておいた。古語古文の知識を深める上に、そのことが多少でも役に立てばと思つたからである。

私はいつも思うことだが、古典の学習ははたから強いられるものではなく、楽しく読んで行く間に、それが身につく

というものでなければならぬ。いやいやながら古典の断章を読むのではなく、面白く読んで古典に親しみをもつということが大切なのである。本書などでもできるだけ安易な気持で読んでもらいたい。そしてもし幸いに親しみがもてたら、二度も三度も繰り返していただきたいのである。そうしているうちに、古典はいつの間にか自分の血肉として、身近に感ぜられて来るであらうと思う。

昭和三十一年夏

麻生磯次

目次

第一章 上代文学……………一九

一 神話と伝説……………一九

古事記の成立……………一九

古事記の内容……………一九

〔一〕 天地の初発の時

古事記の文芸性……………二二

〔二〕 故邂逅はえて

神話の特色……………二六

日本書紀……………二七

風土記の成立……………二八

風土記の内容……………二八

〔三〕 此の野広く大きに

古語拾遺……………三〇

日本霊異記……………三〇

祝詞の構造……………三一

祝詞の内容……………三一

〔四〕 高天原に神留り坐す

祝詞の特色……………三三

宣命……………三三

二 上代の歌謡……………三四

上代人の歌……………三四

記紀の歌……………三四

不定型詩……………三五

〔五〕 品陀の日の御子

奇数句形式の歌……………三六

〔六〕 浅小竹原腰なつむ

〔七〕 をとめの床の辺に

片歌……………三七

〔八〕 はしけやし吾家の方よ

〔九〕 から国をいかにふ事ぞ

短歌……………三八

〔一〇〕 狭井川よ雲立ちわたり

五七調……………三八

長歌……………三九

上代人の苦心……………三九

三 萬葉集……………四〇

萬葉集の組織形態……………四〇

時代区分……………四一

第一期の歌……………四三

〔二〕 大和には群山あれど

〔三〕 冬ごもり春さり来れば

〔三〕 齒さす紫野行き

〔四〕 君待つと吾が恋ひ居れば

第二期の歌

四五

〔五〕 春過ぎて夏来るらし

〔六〕 楽浪の志賀の辛崎

〔七〕 天飛ぶや軽の路は

〔八〕 旅にして物恋しきに

〔九〕 葦辺行く鴨の羽交に

〔一〇〕 石激る垂水の上の

第三期の歌

四九

山上憶良

四九

〔三〕 憶良らは今は罷らむ

〔三〕 瓜食めば子等思はゆ

〔三〕 銀も金も玉も

〔四〕 風雜り雨降る夜の

〔五〕 世間を憂しと恥しと

〔六〕 土やも空しかるべき

大伴旅人

五四

〔七〕 世の中は空しきものと

〔八〕 吾妹子が見し鵜の浦の

〔九〕 妹と米し敏馬の崎を

〔一〇〕 人もなき空しき家は

〔一一〕 妹として二人作りし

〔一二〕 吾妹子が植ゑし梅の樹

〔一三〕 吾が盛またをちめやも

〔一四〕 浅茅原つばらつばらに

〔一五〕 験なき物を思はずは

〔一六〕 古の七の賢しき

〔一七〕 あた醜賢しらをすと

山部赤人

五八

〔三八〕 三諸の神名備山に

〔三九〕 天地の分れし時ゆ

〔四〇〕 田児の浦ゆうち出でて見れば

〔四一〕 若の浦に潮満ち来れば

〔四二〕 み芳野の象山の際の

〔四三〕 ぬばたまの夜のふけゆけば

〔四四〕 春の野に掌採みにと

高橋虫麿

六三

〔四五〕 鶏が鳴く吾妻の国に

〔四六〕 勝鹿の真間の井見れば

第四期の歌

六三

〔四七〕 御民吾生ける験あり

大伴家持

六四

〔四八〕 振放けて若月見れば

〔四九〕 吾が宿の時じき藤の

〔五〇〕 東風のいたく吹くらし

〔五一〕 港風寒く吹くらし

〔五二〕 藤波の影なす海の

〔五三〕 わがやどのいささ群竹

〔五四〕 春の野に霞たなびき

第四期の歌人たち

六六

〔五五〕 うらうらに照れる春日に

〔五六〕 吉野なる夏実の河の

女流歌人

六九

〔五七〕 夕月夜心もしのに

〔五八〕 今の如恋しく君が

〔五九〕 青山を横切る雲の

〔六〇〕 ぬばたまの夜霧の立ちて

〔六二〕君に恋ひいたもすべなみ

〔六三〕吾がやどの夕陰草の

〔六四〕念ふにし死するものに

〔六五〕相念はぬ人を思ふは

〔六六〕君が行く道のながてを

〔六七〕帰りける人來れりと

〔六八〕我がせこが帰り來まさむ

防人の歌

〔六九〕蘆垣の隈所に立ちて

〔七〇〕父母が頭かき撫で

〔七一〕から衣裾に取りつき

〔七二〕色深くせなが衣は

〔七三〕今日よりはかへりみなくて

東歌

〔七四〕多麻河にさらす手作

〔七五〕鳴鳥の葛飾早稲を

〔七六〕信濃道は今のほり道

〔七七〕信濃なる千曲の川の

〔七八〕上つ毛野安蘇のまそむら

〔七九〕稲舂けばかかる吾が手を

抒情的精神

第二章 中古文学

一 平安朝の和歌と歌謡

漢詩文の流行

和歌の命脈

歌合の流行

古今集の成立……………八〇

時期区分……………八〇

読み人知らずの歌……………八一

〔八二〕春日野はけふはな焼きそ

〔八三〕春日野のとぶ火の野守

〔八四〕すがなく秋の萩原

〔八五〕甲斐が嶺をさやにも見しが

六歌仙の歌

〔八六〕忘れては夢かと思ふ

〔八七〕月やあらぬ春や昔の

〔八八〕はちす葉のにこりにしまぬ

〔八九〕よそに見てかへらむ人に

〔九〇〕名にめでて折れるばかりぞ

〔九一〕思ひつつぬればや人の

〔九二〕うたたねに恋しき人を

〔九三〕いとせめて恋しき時は

〔九四〕春の日の光にあたる

〔九五〕思ひ出でて恋しき時は

〔九六〕わが庵は都のたつみ

撰者時代の歌

〔九七〕人はいさ心も知らず

〔九八〕霞立ち木の芽もはるの

〔九九〕春の夜の闇はあやなし

〔一〇〇〕世をすてて山に入る人

〔一〇一〕夜を寒みおく初霜を

〔一〇二〕したにのみ恋ふれば苦し

〔一〇三〕音羽山今朝越え来れば

〔一〇四〕久方の光のどけき

〔一〇三〕 久方の月の桂も	九五
〔一〇四〕 秋来ぬと目にはさやかに	九五
〔一〇五〕 見渡せば柳桜を	九五
〔一〇六〕 夏の夜はまだ宵ながら	九五
〔一〇七〕 朝ばらけ有明の月と	九五
〔一〇八〕 春ごとに流るる川を	九五
七五調の特色	九五
万葉集との比較	九五
後撰集	九六
後撰集の特色	九六
拾遺集	九七
〔一〇九〕 滝の音は絶えて久しく	九七
〔一一〇〕 恋すてふわが名はまだき	九七
和泉式部	九七
〔一一一〕 つれづれと空を見らるる	九七
〔一一二〕 あらざらむこの世の外の	九七
曾根好忠	九八
〔一一三〕 鴨のある入江の水	九八
後拾遺集	九八
〔一一四〕 さびしさに宿を立ち出でて	九八
〔一一五〕 やすらはで寝なましものを	九八
〔一一六〕 夕されば門田の稲葉	九八
金葉集	一〇〇
〔一一七〕 ゆふまぐれ恋しき風に	一〇〇
〔一一八〕 夕されば萩をみなへし	一〇〇
詞花集	一〇一
千載集	一〇一

幽玄	一〇一
〔一二〇〕 夕されば野辺の秋風	一〇一
歌謡	一〇二
神楽歌	一〇二
〔一二一〕 しながどりや猪名の水門に	一〇二
〔一二二〕 若草のや妹も乗せたりや	一〇二
催馬楽	一〇三
〔一二三〕 いで我が駒はやく行きこせ	一〇三
東遊と風俗歌	一〇四
朗詠	一〇四
梁塵秘抄	一〇四
〔一二四〕 新年春来れば	一〇四
〔一二五〕 仏はつねにいませども	一〇四
〔一二六〕 我を頼めて来ぬ男	一〇四
二 平安朝の物語	一〇六
物語の意味	一〇六
竹取物語	一〇六
〔一二七〕 今は昔竹取の翁といふ者	一〇六
伊勢物語	一〇八
〔一二八〕 昔男女片田舎にすみけり	一〇八
大和物語	一〇九
宇津保物語	一一〇
落窪物語	一一〇
〔一二九〕 少将とらへながらさうぞくとときて	一一〇
源氏物語の成立	一一一

構想と主題……………二二

恋愛の種々相……………二二

〔三〇〕 さしもあだめき目馴れたる

物のあはれ……………二四

主人公の人柄……………二四

性格描写……………二五

〔三〇〕 いとほひやかに美しげなる人の

〔三一〕 野分だちてにはかにはだ寒き

〔三二〕 手を書きたるにも深き事はなくて

〔三三〕 まめだちてよろづに宜へど

〔三四〕 八月十五夜くまなき月影

〔三五〕 白き給薄色のなよかなるを

〔三六〕 帰り入りて探り給へば

〔三七〕 中に十ばかりにやあらむと

〔三八〕 いで君も書き給へとあれば

狭衣物語……………二六

浜松中納言物語其の他……………二七

堤中納言物語……………二七

〔三九〕 蝶めづる姫君の

〔四〇〕 人はすべて粧ふ所あるは

三 平安朝の日記・随筆……………三〇

日記の種類……………三〇

土佐日記……………三〇

滑稽的技巧……………三一

皮肉嘲笑……………三一

〔四一〕 今日わりに持たせて

〔四二〕 かくいひてながめつづくる間に

蜻蛉日記……………三二

和泉式部日記……………三三

紫式部日記……………三五

〔四三〕 秋のけはひのたつまに

〔四四〕 清少納言こそしり顔に

更級日記……………三七

〔四五〕 あづま路の道のはてよりも

〔四六〕 かくのみ思ひくんじたるを

讃岐典侍日記……………四〇

枕草子……………四〇

物尽くし……………四一

〔四七〕 里はあふさかの里

〔四八〕 ありがたきもの

逸話……………四二

〔四九〕 雪いとたく降りたるを

自然描写……………四三

〔五〇〕 春はあけぼの

四 歴史物語と説話文学……………四七

栄華物語……………四七

大鏡……………四八

〔五一〕 年ごろむかしの人に對面して

〔五二〕 一とせ入道殿の大井川の

今鏡……………五〇

今昔物語……………五〇

〔五三〕 今は昔中納言藤原忠輔

第三章 中世文学……………一五三

一 中世の和歌と連歌……………一五三

新古今集の成立……………一五三

西行……………一五三

〔一五三〕 心なき身にもあはれは

〔一五四〕 きりぎりす夜さむに秋の

〔一五五〕 さびしさにたへたる人の

式子内親王……………一五三

〔一五六〕 山ふかみ春ともしらぬ

〔一五七〕 窓ちかき竹の葉すさぶ

〔一五八〕 玉の緒よ絶えなば絶えぬ

藤原定家……………一五四

〔一五九〕 春の夜の夢の浮橋

〔一六〇〕 大空は梅のにはひに

藤原家隆……………一五四

〔一六一〕 吉野川岸の山吹

〔一六二〕 にほの海や月の光の

〔一六三〕 しがの浦やとほざかり行く

寂連……………一五五

〔一六四〕 くれて行く春のみなとは

〔一六五〕 むら雨の露もまだひぬ

後鳥羽院……………一五六

〔一六六〕 ほのぼのと春こそ空に

〔一六七〕 見渡せば山もと霞む

藤原良経……………一五六

〔一六八〕 み吉野は山も霞みて

〔一六九〕 雲はみなはらひはてたる
俊成女……………一五七

〔一七〇〕 風通ふねざめの袖の

宮内卿……………一五七

〔一七一〕 うすくこく野べのみどりの

源実朝……………一五八

〔一七二〕 世の中は常にもがもな

〔一七三〕 物いはぬ四方のけだもの

〔一七四〕 箱根路をわが越えくれば

〔一七五〕 もののふの矢なみつくるふ

十三代集……………一五九

主な歌人……………一五九

連歌……………一六〇

〔一六一〕 人こころうし三つ今は

〔一六二〕 薔きぞわづらふ

鎌倉時代の連歌……………一六一

〔一六三〕 我ひとりけふの軍に

南北朝の連歌……………一六二

〔一六四〕 もろきぞ老の

室町時代の連歌……………一六三

〔一六五〕 雪ながら山本かすむ

俳諧の勃興……………一六三

〔一六六〕 かすみのころも

〔一六七〕 うづき米てねぶとに鳴くや

〔一六八〕 にがにがしいつまで嵐

二 中世の物語と御伽草子……………一六四

戦記物語……………一六四

〔一八〇〕 大音声を掲げて此の手の大将は

平家物語……………一六六

〔一八〇〕 与一鎧を取つて番ひ

〔一八〇〕 まことや法輪はほど近ければ

太平記……………一六九

〔一八〇〕 落花の雪に踏み迷ふ

〔一八〇〕 宮を始め奉りて御供の者

義経記……………一七三

曾我物語……………一七三

水鏡……………一七三

増鏡……………一七三

〔一八〇〕 菟姑射の山の峰の松も

神皇正統記……………一七四

擬古物語……………一七五

説話文学……………一七五

宇治拾遺物語……………一七五

〔一八〇〕 これも今は昔比叡の山に

古今著聞集……………一七七

〔一八〇〕 武則公助といふ隨身父子

十訓抄……………一七八

〔一八〇〕 人は慮なくいふまじき事を

〔一八〇〕 近ごろ最勝光院に

御伽草子……………一七九

〔一八〇〕 生れおちてより後せい一寸

三 中世の随筆・日記・紀行……………一八二

方丈記……………一八二

〔一九〇〕 行く川の流は絶えずして

〔一九〇〕 その処のさまをいはば

徒然草……………一八四

〔一九〇〕 をりふしの移り変ること

〔一九〇〕 世にはこころえぬ事の

〔一九〇〕 何事も入りたたぬさま

〔一九〇〕 ある人弓射ることを習ふに

紀行……………一八八

十六夜日記……………一八八

〔一九〇〕 栗田口といふ所より

海道記……………一九〇

東関紀行……………一九〇

四 謡曲・狂言及び歌謡……………一九二

猿楽の能……………一九二

猿楽の諸座……………一九二

世阿弥……………一九二

能の組織……………一九二

謡曲の内容……………一九二

謡曲の脚色……………一九三

謡曲の文章……………一九四

〔一九〇〕 けにや人の親の心は闇に

狂言……………一九六

狂言の詞章……………一九六

狂言の構造……………一九六

狂言の滑稽味……………一九六

〔三〇〕 罷り出でたるは隠れもない大名

歌謡……………一九九

第四章 近世文学……………二〇〇

一 仮名草子と浮世草子……………二〇〇

仮名草子の発生……………二〇〇

浅井了意……………二〇〇

笑話物……………二〇一

〔三〇四〕 ある人寺へ参りて長老さまと

〔三〇五〕 小僧あり小夜ふけて

浮世草子……………二〇三

好色物……………二〇三

武家物……………二〇四

〔三〇六〕 八十郎は屋敷に帰り

町人物……………二〇五

日本永代蔵……………二〇六

〔三〇七〕 天道言ずして国土に

世間胸算用……………二〇九

〔三〇八〕 門の戸のなるたびに女房びくく

西鶴の模倣者……………二一一

八文字屋本……………二一二

気質物……………二一一

〔三〇九〕 何が晝の時分ではあり

二 浄瑠璃と歌舞伎……………二二五

浄瑠璃の由来……………二二三

江戸の浄瑠璃……………二二三

京阪の浄瑠璃……………二二三

近松の時代物……………二二三

国性爺合戦……………二二四

〔三〇〕 案に違はず吹く風と

世話物……………二二六

曾根崎心中……………二二六

〔三一〕 此の世の名残夜も名残

近松の芸術観……………二二七

紀海音……………二二八

操芝居全盛期……………二二八

衰退期……………二二九

初期の歌舞伎……………二二九

元祿頃の歌舞伎……………二二九

歌舞伎の全盛……………二二九

三 俳諧……………三〇〇

松永貞徳……………三〇〇

〔三二〕 すげもなく庭の笠松

〔三三〕 しをるゝは何か杏子の

〔三四〕 冬籠り虫けらまでも

貞門の人々……………三〇一

〔三五〕 順礼の棒ばかり行く

談林の俳諧……………三三

西鶴の俳諧……………三三

談林の付方……………三三

〔三六〕 鳥辺野の煙はたえぬ

〔三七〕 はきたために飄箏一つ

談林の発句……………三三

〔三八〕 お静かにござれ夕陽いまだ

〔三九〕 花むしろ一見せばやと

〔四〇〕 秋やくるのうくそれなる

談林から蕉風へ……………三四

〔四一〕 富士に添うて三月七日

〔四二〕 牛部屋に昼見る草の

〔四三〕 我が寝たを首上げて見る

〔四四〕 猫の子に嗅がれてゐるや

〔四五〕 目には青葉山時鳥

〔四六〕 春の水とところどころに

若い頃の芭蕉……………三六

〔四七〕 たんだすめ住めば都ぞ

〔四八〕 見るに我も折れるばかりぞ

〔四九〕 あら何ともなやきのふは過ぎて

〔五〇〕 枯枝に鳥のとまりたるや

芭蕉庵……………三八

〔五一〕 こゝのとせの春秋

〔五二〕 芭蕉野分して鹽に雨を

〔五三〕 鰯の声波を打つて腸氷る

野ざらし紀行……………三〇

〔五四〕 野ざらしを心に風の

〔三五〕 草枕犬も時雨るるか

〔三六〕 海くれて鴨の声

〔三七〕 狂句木枯の身は竹斎に

〔三八〕 たそやとばしる

笈の小文……………三三

〔三九〕 西行の和歌における

〔四〇〕 春の夜も籠り人ゆかし

〔四一〕 ほろほろと山吹ちるか

奥の細道……………三三

〔四二〕 閑かさや岩にしみ入る

〔四三〕 象潟や雨に西施が

猿蓑……………三四

〔四四〕 灰汁桶の雫やみけり

〔四五〕 油かすりて

〔四六〕 新甕敷きならしたる

〔四七〕 ならべて嬉し

〔四八〕 千代経べき物をさまざま

〔四九〕 鶯の音に

最後の旅……………三六

〔五〇〕 麦の穂を力につかむ

〔五一〕 家は皆杖に白髪のを

〔五二〕 此の道や行く人なしに

〔五三〕 秋深き隣は何を

〔五四〕 旅に病んで夢は枯野を

蕉門の人々……………三八

〔五五〕 日の春をさすがに鶴の

〔五六〕 名月や煙はひ行く

〔五七〕 うづくまる葉のものとの

〔三六〕 木枯の地にも落さぬ

〔三七〕 涼風や青田の上の

〔三八〕 食堂に雀鳴くなり

〔三九〕 焼けにけりされども花は

〔四〇〕 長松が親の名で来る

〔四一〕 山寺に米搗く程の

〔四二〕 梅の花赤いはく

〔四三〕 市中は物のにほひや

〔四四〕 がつくりと抜けそむる齒や

混沌時代

革新の機運

蕪村の近代性

〔四五〕 柳ちり清水かれ

〔四六〕 立去る事一里眉毛に

多彩な芸術家

〔四七〕 菜の花や月は東に

〔四八〕 夕風や水青鸞の

〔四九〕 蚊の声す忍冬の花の

〔五〇〕 指貫を足でぬぐ夜や

〔五一〕 指南車を胡地に引去る

天明の諸家

化政時代

〔五二〕 つぶ瀧の大名を見る

〔五三〕 やれ打つな颯が手をすり

〔五四〕 名月の御覧の通り

〔五五〕 涼風の曲りくねつて

〔五六〕 これがまあ終の栖か

〔五七〕 名月や膳にはひよる

〔五八〕 こその夏竹植うる日のころ

天保時代

〔五九〕 ついてゐて掃かすや背戸の

四 川柳と狂歌

前句付

〔六〇〕 残念なこと

柳多留

俳句との比較

〔六一〕 口上を下女は尻から

〔六二〕 道のべの木樞は馬に

〔六三〕 草臥れて宿かるところや

〔六四〕 まゝ事の世帯くづしが

川柳の可笑味

〔六五〕 役人の子はにぎくを

〔六六〕 大名の過去は野にふし

〔六七〕 五戒より和尚やつかい

〔六八〕 仲人にかけては至極

〔六九〕 先生へいかごととへば

〔七〇〕 お釈迦様生れ落ちると

〔七一〕 一門はどぶりとどりと

〔七二〕 寝てゐても団扇の動く

〔七三〕 梶と箸持つて来やれと

〔七四〕 猫のめし入れ添へてやる

民衆の文学

狂歌

江戸初期の狂歌……………二五四

〔三九七〕 年の内の春に生るる

元禄期の狂歌……………二五五

〔三九八〕 月ならで雲の上まで

〔三九九〕 世の中はかりの世なれど

〔四〇〇〕 わが宿は御堂の辰巳

天明調……………二五六

〔四〇一〕 山吹のはな紙ばかり

〔四〇二〕 ほととぎす鳴きつるあとに

江戸末期の狂歌……………二五六

〔四〇三〕 歌よみは下手こそよけれ

五 国學と和歌……………二五七

國學の發展……………二五七

前期の和歌……………二五八

〔四〇四〕 にほとりの葛飾早稲の

〔四〇五〕 信濃なるすがの荒野を

隨筆……………二五九

〔四〇六〕 よろづよりも手はよく

〔四〇七〕 手かくわざはいにしへの

〔四〇八〕 年あらたまりてはなに事か

後期の和歌……………二六一

〔四〇九〕 大井川月と花との

〔四一〇〕 いづくより胸うち入れむ

〔四一一〕 かにかくにうとくぞ人の

〔四一二〕 むらぎもの心たのしも

〔四一三〕 梓弓春になりなば

六 草双紙と読本……………二六四

黄表紙……………二六四

〔四一三〕 此上は盗人にとらせるより

〔四一四〕 人のねたる時は魂が遊びに

合 卷……………二六六

〔四一五〕 花の都の室町に花を飾りし

読 本……………二六七

前期の読本……………二六七

雨月物語……………二六八

〔四一六〕 窓の紙松風を啜りて

水滸伝物……………二六九

後期の読本……………二六九

滝沢馬琴……………二七〇

八大伝……………二七一

〔四一七〕 いにしへの人いはずや禍福は

〔四一八〕 されば又大飼見八信遣は

七 洒落本・人情本・滑稽本……………二七六

初期の洒落本……………二七六

聖遊廊……………二七六

〔三七〕 愛に聖人の通ひたまへる

展開の第二期……………二七六

展開の第三期……………二七六

人情本……………二七六

初期の人情本……………二七六

全盛期の人情本……………二七六

〔三八〕 折から障子引きあけて

人情本の特徴……………二八〇

滑稽本……………二八〇

風来山人……………二八一

膝栗毛物……………二八三

〔三九〕 イヤこらがどうか浅いやうだ

気質物……………二八四

〔四〇〕 ヲ、あふいぞあふいぞ

茶番物……………二八五

滑稽本の特徴……………二八六

第五章 近代文学

一 小説……………二八七

イ 開化期の小説……………二八七

明治維新……………二八七

新旧の対立……………二八七

西洋道中膝栗毛……………二八八

安愚楽鍋……………二八八

〔四一〕 モシあなたエ牛は至極高味

毒婦物……………二八九

新聞……………二九〇

ロ 翻訳小説と政治小説……………二九〇

翻訳の態度……………二九〇

花柳新話……………二九一

あひびき……………二九一

政治小説……………二九二

経国美談……………二九三

佳人の奇遇……………二九三

ハ 写実小説の萌芽……………二九四

小説神髓……………二九四

当世書生気質……………二九四

〔四二〕 ハイ守山さん御晩餐

浮雲……………二九五

〔四三〕 まくらもとで呼びさます

ニ 文芸復興派の小説……………二九六

古典復興……………二九七

硯友社……………二九七

山田美妙……………二九七

尾崎紅葉……………二九八

幸田露伴……………二九八

〔四四〕 いづれも感成寺生靈塔の

伝統派……………三〇一